

# 温故知新

増田善昭\*

病気の回復が医師の手によるよりも自然の力による所が多いことはわれわれが銘記しなければならない事実であるが、これは生体内の正常な状態が乱された時、それを元に戻す作用が働くことを示している。交感神経の研究で有名なキャノンは生体はその内部環境を一定に保つ作用をホメオステージスと名付け、これが生物の生存の統括的原理であり、われわれがこの調節と制御に関する原理を理解すれば、疾患を治癒し得るだけでなく、産業や国家等の社会組織の悩みや不安を解消することも可能であると述べている。医学の研究にさいしてホメオステージスの機構を解明することは常に念頭に置かなければならないことである。

さて、循環系にはホメオステージスにかかわる数多くの調節、制御機構が存在するが、その中でもっとも古くから研究されているものの一つに1924年ヘリングによって明かにされた血圧調節、制御機構としての頸動脈洞反射がある。振り返ってみると私の学位論文も頸動脈洞神経および大動脈神経線維に関する研究であり、その後の循環生理の研究を含め現在に至るまで何らかの形で循環調

節の研究にかかわってきたことになる。

ところで残念なことに頸動脈洞反射に関する研究は近年ほとんど行われなくなった。このような調圧神経機構は古くから研究され、よく分っているからとも思われるが、実はまだまだ分らないことだらけである。例えば調圧神経の異常は高血圧や起立性低血圧の原因としてどのようにかわり合っているのだろうか、調圧神経はなぜ動脈硬化の起り易い頸動脈分岐部と大動脈弓部に集中しているのだろうか、血圧調節神経と化学調節神経はどのような関係を持っているのであろうか等々、解明すべきことは多い。そうなると頸動脈洞反射の研究の減少は問題が解決されたからではなく、解決するための新しい技術が不足しているためであることに気がつく。さて、最近、高周波の超音波プローブを皮膚表面から使用して頸動脈および洞の壁構造が非観血的に精密に描出できるようになった。現在はまだアテロームを中心とした壁構造変化の研究に止っているが、今後、この技術を利用すれば、臨床的にも頸動脈洞反射の病態が明かになるものと思われ楽しみである。

\*千葉大学医学部第3内科教授